



私がいることで 安心してもらいたい

衣浦東部広域連合 碧南消防署 救急1係 いなぎたかひろ 稲垣貴大さん

命を救うために 知識を増やす

1987年から11月9日が「119番の日」として設けられました。119番通報を受けて出動する救急隊員の思いや日々の努力に迫りました。

話を伺ったのは、救急救命士の国家資格の取得を目指して研修中の稲垣貴大さん。救急救命士になるために、半年間東京で研修を受けています。

さらに、研修後の国家試験に合格してはじめて救急救命士になります。

救急救命士は、救急車で現場に駆けつけ、傷病者が病院に搬送されるまでの間に救急救命処置を施す役割を担います。医師からの具体的な指示を受け、家族からの同意を得た上であれば、医療器具を用いた気道確保や輸液、薬剤投与といった高度な救命処置を行うことができます。

稲垣さんに、救急救命士を目指す理由などを聞きました。

問 経営企画課広報戦略係 ☎95-9867





稲垣貴大さん

東中学校卒。趣味はフットサルで、中学校の同級生とフットサルチームをつくり、今でも休日に碧南市内で体を動かしています。



父の姿にあこがれて

父も救急救命士として碧南消防署に勤務していたことが、救急救命士を目指すきっかけになっています。

子どもの頃、サッカー少年団に入ってサッカーをしていた時に、けがをした人のところへ父が誰よりも早くかけよっていかっこといっていました。その姿を見て、自分も消防士・救急救命士になろうと思いました。

父と仕事の話をするとときに、父の知識の多さに驚いています。自分は現在勉強していますが、父は数年前に定年退職していますが、父が知識を今でもずっと保っているのはすごいなと思います。

感謝されることがやりがい

救急の仕事は、常に病気やけがなどの新しい知識を保つていなければいけません。ずっと勉強し続ける必要があることが大変なところですね。

それでも、傷病者の家族に感謝してもらえたときにやりがいを感じます。搬送したときに家族の方から「ありがとう」と言っていたら、初めて自分の知識が役立ったと感じ、自分のしていることは間違っていないと思えました。

安心してもらうために

出動する際は、傷病者や家族に対する接遇を一番大切にしています。処置の確さだけでなく、私がいることで、傷病者やその家族に安心してもらえることが一番大事だと思っています。接遇は誰にも負けちゃいけないという気持ちでいます。

また、知識がないと適切な処置ができず安心してもらえないと思います。救急救命士になると、行うことのできる処置が増えます。

救急救命士になることが自分の大きな目標ですが、ただ国家資格をとるだけではだめで、皆さんに貢献できなかつたら意味がないと思っています。傷病者の痛みをできるだけ緩和することが自分の仕事です。身につけた知識で、皆さんに安心してもらいたいです。

救急車は必要なときだけに

救急車の必要がないのに119番通報されるケースがあります。その間に119番通報があると、救急車の到着までに時間がかかってしまいます。特に心肺停止の場合、救命率が低下してしまうことがあるので、救急車の適正な利用にご協力をお願いします。



救急救命士になったからといって、全ての処置を行えるわけではありません。さらに勉強して県の認定試験に合格することで、行うことのできる処置が増えていきます。常に新しい知識を身につけているから、命を救う存在になれるのです。

